

精神看護実習に求められる教授活動のあり方

— 実習終了時の質問紙による学生評価から —

井上 聡子¹⁾ 松岡 治子²⁾ 福山なおみ¹⁾

要 旨

本研究の目的は、精神看護実習で学生が感じたこと・学んだことを分析し、重要な教授活動は何かを考察することである。対象は、看護短期大学の精神看護実習を行った3年生55名である。実習で学生が学んだことおよび教員とのかかわりを問う質問紙を作成し調査した。その結果、精神看護実習に求められる教授活動は、1. 学生の感情を考慮し前向きに実習に臨めるようにする。2. 患者の生活行動の意味について学生の思考を整理・促し、計画立案につなげる。3. 自己理解する際の反応の特徴を知識として活用し学生を支える。4. 学生が自己活用しながら患者との関係を構築しよりよいケアを見出せるようにする。5. 学生の自尊心を支えながら思考過程をサポートする。6. 教員自身の感情を振り返りながら学生にかかわるようにする。7. 学生の体験を学生とともに客観的に振り返り意味づけられるようにする。さらに、看護者としてのロールモデルを示すことは、精神看護の看護技術を学ぶ機会となる。

キーワード：看護教育 精神看護実習 教授活動 評価 看護学生

I はじめに

平成9年の看護教育に関するカリキュラム改正により、精神看護学が柱立てとなった。これに伴い、様々な看護大学で精神看護学の科目に関する学習目標や内容が紹介されている。^{1) - 6)} 当短大も新カリキュラムになり、これまでに3学年の実習を終えた。この期間実習をすすめていく中で、学生はどのようなことを学んでいるのか、そして、教員は実習目標を達成できるかかわりができているのであろうかと思っていた。

また、看護学生の精神障害者に対するイメージの特徴は、「不安定で、こわくて、近寄りがたいなどのネガティブなもの」⁷⁾がある。学生の多くは生活の中で身近に精神障害者と接する機会も少ない。このような状況で学生が精神看護実習を行うことは、患者に接したりケアをする際に、より多くの不安を抱くことになる。また、受け持つ対象は心を病む人であることから看護者の思考や感情がより患者に影響しやすい。そのため、看護者は自己の振り返りや自己活用を中心としたかかわりが重要である。これ

らのことを学ぶことは、精神看護実習の特徴ともいえ、その際の教授活動は、学生が有意義な実習を行いながら実習目標を達成する上で重要と考える。

しかし、これらの精神看護実習の特徴を考慮した実習の評価方法は少ない。また、実習の評価は教員側と学生側の双方から行うことが重要と考える。

そこで、今回の研究の目的は、精神看護実習で学生が感じたことや学んだことを分析し、明確化することにより教授活動の評価を行うこと、さらに、教授活動で重要なことは何かを考察することとした。

II 用語の定義

自己活用を中心としたかかわり：看護者が自分自身、あるいは患者に対して抱く主観的・客観的・情緒的な意識や、看護者の患者へのかかわりの特性や傾向を意識しつつ、それらをコミュニケーションや実際の看護場面に取り入れて援助していくこと。

III 予備調査

本研究の質問紙を作成するための予備調査を行った。この結果を、精神看護実習において求められる教員の教育的かかわりとは何かの視点で整理した。

1. 調査対象：平成12年度にK看護短大で精神看護

1) 川崎市立看護短期大学

2) 群馬大学医学部保健学科

実習を行った3年次生72名、回収数39名（回収率54.2%）

2. 調査期間：平成12年11月18日～同年11月27日
3. 調査方法：全ての応用領域実習の終了直後、精神看護実習で学生が感じたこと・学んだこと、および教員とのかかわりに対して感じたことを問う自作の質問紙（無記名自記式）を作成し配布した。調査の目的を説明し、協力の得られる学生から郵送により回収した。
4. 調査内容：実習に臨むときの気持ちと、実習後の気持ちおよび実習目標に関する21項目を『とてもそう思う』～『まったくそう思わない』の4段階評価とした。また、学生が実習に対して学べたことは何か、学びをどういかしていきたいと考えているか、教員の指導を通して感じたこと・得られたこと・要望、自分を振り返ることの意味をどのように考えているか、行った看護を振り返ることの意味、感想の6項目を自由記載とした。
5. 調査結果：実習に臨むときにはさまざまな気持ちを抱いていた。また、実習目標や教員の指導については、看護過程に関すること、ケアの意味づけを深く考えること、自己を振り返る機会を得ること、対人関係を築いていくことの重要性、学生を尊重しながらかかわること、実習環境への配慮などの内容が得られた。

IV 研究方法

1. 調査対象：K看護短大で精神看護実習（以下実習とする）を行った平成13年度3年次生で今回の研究に協力が得られた55名。
2. 調査期間：平成13年5月～同年11月
3. 調査方法：実習で学生が学んだこと、および教員とのかかわりに対して感じたことを問う自作の質問紙（無記名自記式）を作成し、実習終了日に配布し記入してもらい、その日の終了時に回収した。
4. 調査内容：質問紙は本学の実習の教育目標⁸⁾、梶田（1999）の教育評価⁹⁾、および予備調査から得た内容を基に、実習に臨む感情、および『非常にその通り』～『かなり違う』の7段階28項目からなる質問と自由記載の1項目の質問からなる自作の質問紙とした。（資料1）
5. 分析方法：SPSS 10.0 Ver. for Windowsソフト

による単純集計、実習前に抱いていた各感情の関連、および各感情と設問1～28とについてクロス集計を行った。自由記載の質問には、回答した事柄を同じ内容ごとに分類し、それらを学生が実習に対してどの様に感じていたかという視点でカテゴライズした。

6. 倫理的配慮：研究の趣旨を説明し、研究の参加は自由であること、また、成績には影響しないこと、プライバシーを守ることを説明した。これに同意の得られた学生に調査を依頼した。

V 結果

質問紙は49部回収し、うち有効回答は44部（有効回答率80%）であった。学生がどのような感情を抱き実習に臨んでいたかは、不安を抱いていた人は『その通り～非常にその通り』を合わせて59.1%、同様に、楽しみを抱いていた人が22.7%、期待を抱いていた人は15.9%、嫌だったと感じていた人が11.4%であった（表1）。また、不安を『その通り～非常にその通り』と感じながら、楽しみ、期待を少し持つ人の割合はそれぞれ20.5%（9人）、23.3%（10人）であった（表2）。

学生の実習前に抱く感情間のクロス集計において、 χ^2 検定は少人数のため行わなかった。また、それぞれの感情と設問1～28のクロス集計の結果は、少人数のため両者間に有意な差はなかった。

次に、実習中教員とのかかわりで、学生が回答した中で、『その通り』『非常にその通り』を合わせて8割を超えた項目は、「考えを引き出してくれた」、「思考の整理ができた」、「アセスメントができた」、「かかわりにより、自分の行った言動や行動を振り返り意味づけられた」、「自己理解が深まった」、「尊重してもらえた」、「保証してもらえた」、「称賛してくれた」、「相手へのかかわりにいかしていった」、であった。

また、実習に関する感想として14名から回答があり、28個の内容が得られた。それらは15個の同じ内容（以下〈 〉）に分類でき、8個にカテゴライズ（以下《 》）できた（表3）。

VI 考察

1. 実習前に抱く感情について

本研究対象の学生も、半数以上が実習に対して「不安」を抱きながら実習に臨んでいた。また、一

表1 実習前に抱いていた感情

1) 楽しみだった

程度	人	度数	率 (%)
かなり違う		3	6.8
違う		4	9.1
少し違う		7	15.9
どちらでもない		9	20.5
少しその通り		11	25.0
その通り		8	18.2
非常にその通り		2	4.5
合計		44	100

2) 不安だった

程度	人	度数	率 (%)
かなり違う		1	2.3
違う		1	2.3
少し違う		2	4.5
どちらでもない		0	0
少しその通り		14	31.8
その通り		16	36.4
非常にその通り		10	22.7
合計		44	100

3) 期待していた

程度	人	度数	率 (%)
かなり違う		2	4.5
違う		5	11.4
少し違う		4	9.1
どちらでもない		11	25.0
少しその通り		14	31.8
その通り		5	11.4
非常にその通り		2	4.5
無回答		1	2.3
合計		44	100

4) 嫌だった

程度	人	度数	率 (%)
かなり違う		3	6.8
違う		12	27.2
少し違う		9	20.5
どちらでもない		9	20.5
少しその通り		6	13.6
その通り		4	9.1
非常にその通り		1	2.3
合計		44	100

表2 不安とその他の感情との関連

不安		気持ちの程度	楽 し み			合計
			かなり違う・ 違う	少し違う～ 少しその通り	その通り・ 非常にその通り	
不安の程度	非常にその通り～その通り		6	18	2	26
	少しその通り～かなり違う		1	9	8	18
合 計			7	27	10	44

(人)

不安		気持ちの程度	期 待			合計
			かなり違う・ 違う	少し違う～ 少しその通り	その通り・ 非常にその通り	
不安の程度	非常にその通り～その通り		4	21	1	26
	少しその通り～かなり違う		3	8	6	17
合 計			7	29	7	43

(無回答1) (人)

不安		気持ちの程度	嫌 だ っ た			合計
			かなり違う・ 違う	少し違う～ 少しその通り	その通り・ 非常にその通り	
不安の程度	非常にその通り～その通り		7	15	4	26
	少しその通り～かなり違う		8	9	1	18
合 計			15	24	5	44

(人)

方で、不安がありながらも「楽しみ」や「期待」を少し抱いて実習に臨んでいる学生もそれぞれ、20.5%、23.3%いた。これは、「精神科看護実習は学生にとって非常に抵抗を感じたり、緊張する実習の1つであり、目に見える技術ならばまだ練習もできるが、事前学習に何をしたらよいのか、どのような患者に出会うのか予測がつきにくいことが予期不安

を助長している¹⁰⁾ というように、不安と期待が交錯しながら実習に臨む学生の心境を表しているものと理解できた。精神障害者と接する機会が少ない学生にとって、これから看護していこうとする人はどのような人であるのかを考え、不安や楽しみを持つことも考えられる。また、楽しみは学習の動機づけを高める要因であることから、不安というネガティ

表3 実習終了時における学生の自由記述の分類

実習に関して得られた学生からの意見	実習中に学生が感じたこと・学べたこと	カテゴリ
1. 自分自身、いろいろ考えるが自信がないところがあり、そんな時、先生のアドバイスやフィードバックで振り返りができた。 2. 毎日話をする時間を取ってくれたことで、自分のケア、自分自身を適宜振り返っていくことができ、実習がとてもやりやすかった。	教員のかかわりにより 自己の振り返りが できた	自己の気づきを 促す教員のか かわり
3. この精神看護実習の中で、精神疾患をもつ患者さんに対する看護のほかに、実習に臨む上での基本的態度や思いについて改善すべきことを自分やグループの中での見方を教員の指導により学び考えることができたので、これからの実習にも生かせると思った。 4. ショートカンファレンスやロングカンファレンスを行うことで、先生方はもちろん他学生の人たちの意見やアドバイスを聞くことにより、いろんな視点から考えることができ、よい学びとなった。	学びの広がり	実習目標への 達成状況
5. 精神の実習では、心のかかわりが多く、自分でも説明できない部分があり、そんな時、スタッフの方や、主に先生の助言によって前に進めた。	心を病む人への かかわり方の明確化	
6. 居心地のいい実習だった。 7. 患者さん、看護師スタッフの方々、そして先生方のおかげでもとても良い実習になったと思う。 8. 環境が整っており、よい実習ができた。	実習環境の充実	実習を支える 環境要因
9. 先生がいなかったら、2週目は実習を投げ出していたと思う。 10. 先生の対応がとてもよかった。癒された。 11. 先生がいなかったら、絶対乗り越えられなかった。	教員に支えられた	
12. 自分のかかわりに少し自信をもてた。 13. (自分自身、いろいろ考えるが自信がないところがあり、そんな時、先生のアドバイスやフィードバックで振り返りができたり、) 自信へとつながることができ、とても助かった。	自信がもてた	教員により 自尊心を 高められた体験
14. 励ましてもらえた。 15. 私たちのよい点を見つけしっかり誉めてくださったのがとても嬉しかった。今までの実習ではそのような経験がほとんどなかった。 16. 支持し、アドバイスをもらった。	尊重してもらえた	
17. 精神的に追い詰められているとき、本当にゆっくり、自分の考え方をすべて伝えることができた。 18. 自分(私)のやっていることを確認してもらえた。	自分の考えを 認めてもらえた	自分の存在を 支えられた体験
19. 受容してもらった。	自分自身を 受容してもらえた	
20. (毎日話をする時間を取ってくれたことで、自分のケア、自分自身を適宜振り返っていくことができ、実習がとてもやりやすかった。) できない事、分からないことが多くて大変だったけれど、このおかげで2週間やっていけたのだと思う。 21. 学びの深い実習が行えたことで、今までの中でも達成感のある実習を行うことができた。	達成感が得られた	実習に対する 充実感の体験
22. 実習をとおして、すごく実習が楽しいと思えるようになった。 23. (この精神看護実習で、精神疾患をもつ患者さんに対する看護のほかに、実習に臨む上での基本的態度や思いについて改善すべきことを自分やグループの中での見方を教員の指導により学び考えることができたので、これからの実習にも生かせると思ったし、) それに気づかせてくれてすごく嬉しかった。	楽しさ・嬉しさを 感じた	
24. この実習で、私たちの態度により先生の信頼を失ったときは、とても苦しかった。 25. 自分でわかっていてできないことを言われることで、自分の努力も今までしてきたこともすべて、否定された気持ちになって、つらかった。きっと、この胸のわだかまりは消えないだろうと思う。	自己を否定するよう な出来事	感情を揺るがす 体験
26. 最初は、不安が多くて接し方がわからず、どうしたらいいかわからなかった。	接し方に対する不安な 気持ちの存在	
27. 先生の人柄、考え方に看護師の先輩として、あこがれ、尊敬した。私も、素敵な人、看護師になりたい。	良いロールモデルとの 出会い	職業的アイデン ティティ の基礎づくり
28. この実習を通して精神看護に少し興味が出てきて将来やってみたいと思えるようになった。	精神看護を志向する 気持ちの出現	

ブな心理にだけかかわるのではなく、不安を抱きながら楽しみというポジティブな感情を支え、実習に臨めるようにかかわることが教授活動として大切であると考えられる。

2. 実習中の教育的かかわりの内容

1) ケアの意味づけをより深めるかかわり

28項目の設問の中で、学生が特に感じていた項目は、看護過程を学習していく中で、教員とかわることで「考えを引き出してもらえ」、「思考の整理」・「アセスメントができた」であった。精神科看護では、「生活行動アセスメント→ケアプランの間にもうワンステップ、生活行動の隠された意味についてのアセスメントが必要であり、その作業こそ専門的といえる技術である」¹¹⁾ ことから、看護師は患者が抱えている思いや患者の中で体験している世界を理解し、そのことから日常生活に影響していることをアセスメントすることがまず重要となる。学生は患者に接して感じたり、考えたりしていることがたくさんあるにもかかわらず、それらを自ら統合しケア方法を考えていくことに関して困難さを感じていると考えられる。実際、学生に尋ねると、「精神看護実習は楽しかった」、「患者の反応もよく、こんなふうを感じていることがわかった」などと答える人が多い。しかし、自分のどのかわりがどのような意味をなす看護であったのか、また、患者にとって何故よかったのかなどを質問してみると、答えに窮することが多い。今回の質問紙調査結果から、教員は学生が考えていることを統合する際にかかわり、患者の生活行動に隠された意味についての思考を整理・促し、次の計画立案につなげられるようなかわりができていたのではないかと考えられた。また、これは精神看護実習における特徴的な教授活動の役割ではないかと考える。

2) 自己理解・自己活用を促すかわり

次に、学生は「かわりにより、自分の行った言動や行動を振り返り意味づけられた」、「自己理解が深まった」「相手へのかわりにいかしていった」と回答した学生が多かった。この3つの内容は、患者-看護者関係論の学びを深めている結果であると考えられる。精神障害を持つ人は独特の対人関係パターンを持ち、学生には理解困難となる場合がある。しかし、「看護師が防衛機制を働かせている自己の感情に気づくことは、適応行動への変化につながり、

また、看護師が感情のコントロールができると、看護の目的に向かった行動へと変化する」¹²⁾ ことから、精神障害を持つ人に接するとき、看護師は自らの感じ方や考え方を振り返り、自己理解をとおして相手を理解していくこと、そして、自分の良さを上手く使い分け-自己活用しながら-相手との関係を構築し、それを通してよりよいケアを考え出していくことが大切である。特に青年期の学生は、自分が拒否されたと認識すると、自分自身の感情が揺らぎ、患者に関心が向かなくなる傾向がある。福山らは、「看護師の自己理解の特徴には、『患者に抱く感情』：不安・恐怖・ゆとり、共感、『患者への感情表出』：自分の感情を患者に伝える、『看護師の自己概念』：抑圧、自責の念、自尊心の低下がある」¹³⁾ と述べており、学生は精神看護実習においてこのような体験をしていると考えられる。自分を知るということは自己概念を揺さぶられる体験である。教員は、このような学生の反応の特徴を理解した上で、学生の存在を支えていくかわりが必要になると考えられる。

また、「看護職者の感情に基づく認識のありようが、その後の看護現象を左右し」¹⁴⁾、「看護師の感情から引き起こされる認識がその後の両者のコミュニケーションを左右する」¹⁵⁾ といわれていることから、「かわりにより、自分の行った言動や行動を振り返り意味づけられた」、「自己理解が深まった」という結果は、その後の患者へのケアに影響していくものではないかと推察される。

3) 学生を尊重するかわり

「尊重してもらえた」、「保証してもらえた」、「称賛してくれた」という結果について述べる。これらは、患者ではなく学生自身に向けられた内容である。多くの学生がこの3つを感じていたことの意味は、次のように考えられた。これら3つのかわりの内容は、その人の自尊心を支えるかわりであるといえる。「自尊心が損なわれた人は患者でなくても相互的な対人関係を結ぶことはできない」¹⁶⁾ ことから、自尊心を支えることは相対する人と対等の関係を構築していく上で重要である。同時に、自尊心を支えてくれる存在が身近にいることを患者が認識できることは、生活していく中で脅かされない環境を提供されていることになると思われる。学生のこれらの体験が、看護をしていく上で重要であると理解できた時、自分の体験を通して-自己活用しながら-患

者に援助をしていけるようになると思われる。また、このことは精神障害の有無に限らず、あらゆる対象を看護していくとき、また、対象を支えていくときの看護者の資質として大切である。この能力を身につけられるような機会を提供することが教授活動の役割として重要であると考えられた。

3. 実習に対して自由記載された内容の考察

1) 実習環境の充実と実習目標の達成へのかかわり

一般的に実習を行う上で必要な教員の役割として、〈実習環境の充実〉や〈教員に支えられた〉体験を得て学びを広げるようなかかわり、即ち、《実習を支える環境要因》や《実習目標への達成状況》を学生は望んでいることがこの質問紙調査からも得られた。

2) 学生を全人的に受け入れよりよい学習環境を提供すること

学生は、〈自信を持てた〉・〈尊重してもらえた〉という《教員により自尊心を高められた体験》や〈自分の考えを認めてもらえた〉・〈自分自身を受容してもらえた〉とする《自分の存在を支えられた体験》、そして、〈達成感が得られた〉・〈楽しさ・嬉しさを感じた〉とする《実習に対する充実感の体験》を感じていた。これらの内容は、教員が学生を全人的に受け入れつつ、学生の考えを認め、受け入れる姿勢を持つこと、さらに、学生は緊張の高まる環境の中で、学ぶことの充実感を得たいと感じていることだと解釈できた。成人教育者の役割は、「学習者一人一人の成長を助け、自己認知と自己概念の変容を促し、自己認識の発達を支えることであると考えられており」¹⁷⁾、教員は学生個々を受け入れ、学生が今まさに発揮している認知・学習機能に働きかけ、そこから学生の気づきや思考過程の発展をサポートするかかわりが重要である。また、自己発達について、「マズローは庇護、安全な環境といったより基礎的な欲求が満たされなければ、人は自己実現に向かうことはできないと論じた。」¹⁸⁾ さらに、「学習者が置かれている環境と心地よさが強調され、学習は受容的な雰囲気によって促進されると言われ、また学習がもっともよくおこなわれるのは、個人の自己尊重が肯定されることであると述べている。」¹⁹⁾ このことから、今回の教員のかかわりは、学生を尊重することや自尊心を支えながら、学習を促進するかかわりであった。同時に、教員は受容的な態度と学習をする上での安全な環境を学生に提供すること

ができていたといえる。

3) 学生が安心して自己を振り返ることができるようなかかわり

学生は他者に対して〈接し方に対する不安な気持ち〉を感じていた。一方で、教員との信頼関係を築けず〈自己を否定するような出来事〉の《感情を揺るがす体験》をしていた。杉森は、「看護学実習における教授活動は、学習成果に影響を及ぼす重要な要因である。また、学生が思うような学習成果を上げられないとき、教員は、学生自身の問題と共に自己の教授活動を見直す必要があると述べ、教員役割達成に向けた視座と指導方法の転換、学生の指導受け入れ不十分による戸惑いと不本意な相互作用という概念をあげている。」²⁰⁾ 今回のように感情が揺れ動く学生にかかわるとき、そこにかかわる教員も人間であることから、両者の感情が相互作用しながら関係が進んでいく。故に、教員も自己の感情を振り返りながら学生とかかわっていくことが大切であると考えられた。同時に、学生に対して何故自分が否定されたと感じるのか、何故今自分は不安なのかを自らの感情を客観的に振り返るかかわりが重要である。その際大切なことは、学生が自分自身を教員が受容してくれているという意識を持てるように支えることであり、そのためには、教員と学生との信頼関係が大切である。このことにより、学生が安心して自分自身と向き合えるような環境をつくることにつながるのではないかと考える。そして、教員はその学生とともにそのとき生じた学生の感情や認識を振り返り、意味づけるかかわりを効果的に行っていくことができるのではないだろうか。このような体験を積み重ねる精神看護実習での教員のかかわりは重要であると考えられた。

4) より良いロールモデルを示すかかわり

精神看護においては、有用な看護技術として自己活用を中心としたかかわりが挙げられるが、学生は精神看護実習において、何が看護であるのかをイメージしにくいようである。その意味でも、看護者としてのロールモデルを学生に示すことは、精神看護に関する看護技術を学ぶ重要な機会となる。〈よいロールモデルとの出会い〉や〈精神看護を志向する気持ちの出現〉という《職業的アイデンティティの基礎づくり》を感じられることは、実習において得られる気持ちである。さらに教員だけでなく、看護スタッフとともにケアに参加することは、学生自身

がチームの一員であることを認識でき、看護者として将来への展望につながると言えよう。

Ⅶ 結 語

精神看護実習に求められる教授活動は、

1. 学生の感情を考慮し前向きな姿勢で実習に臨めるようにする。
2. 患者の生活行動の意味について学生の思考を整理・促し、次の計画立案につなげる。
3. 自己理解する際の反応の特徴を知識として活用し学生を支える。
4. 学生が自己活用しながら患者との関係を構築しよりよいケアを見出せるようにする。
5. 学生の自尊心を支えながら学生の思考過程をサポートする。
6. 教員自身の感情を振り返りながら学生にかかわるようにする。
7. 学生が体験した感情や認識を学生とともに客観

的に振り返り意味づける。

さらに、看護者としてのロールモデルを示すことは、精神看護の看護技術を学ぶ重要な機会となる。

Ⅷ 研究の限界と今後の課題

本研究の結果は精神看護実習における学生への教育的なかかわりの方法として活用できるものと考えられる。

本研究は、一学年による質問紙調査からの結果であり分析の対象数が少ないことから、今後も継続的な確認・検証を行い、本研究の結果の信頼性を高めていく必要があると考える。また、学生の感情が揺らいでいるような状況にかかわる時の教授活動についても、さらに検討を重ねていきたい。

謝 辞

本研究にご協力いただいた学生の皆さんに深謝する。

引用文献

- 1) 小林純子，片岡三佳：新カリキュラムにおける精神看護学臨地実習－看護短期大学の立場から－，精神科看護，第64号，13－18，1997
- 2) 森千鶴：対象者を理解することの意味を問う精神看護学実習，看護展望，第26巻，第6号，85－91，2001
- 3) 花田裕子：精神看護学のカリキュラムと教授方法の試行，精神科看護，第26巻，第4号，60－63，1999
- 4) 佐伯恵子：精神看護学の教育方法－精神看護への関心を高め、臨地実習での学びを深めるために－，精神科看護，第26巻，第9号，54－59，1999
- 5) 松岡緑，瀬山良子：佐賀医科大学における精神看護学カリキュラム（その2・臨地実習），精神科看護，第26巻，第8号，55－59，1999
- 6) 小林美子：長野県看護大学における精神看護学の教育，精神科看護，第26巻，第10号，55－58，1999
- 7) 松岡治子，福山なおみ，湯沢治雄：看護学生の精神障害者観の形成に関する一考察，川崎市立看護短期大学紀要，第7巻，第1号，17－23，2002
- 8) 川崎市立看護短期大学実習要項，（平成11年度入学生用）
- 9) 梶田毅一：教育評価，(2)，有斐閣双書，1999
- 10) 横田碧：精神科看護実習教育－精神科看護実習を通して学生たちは何を学んでいるか－，保健の科学，第39巻，第6号，379－383，1997
- 11) 武井麻子：わが国における精神看護学の現状と課題，日本看護協会編集，平成9年度版看護白書，102－109，日本看護協会，1997
- 12) 福山なおみ，松岡治子，井上聡子：看護者の自己理解が患者とのコミュニケーションに及ぼす影響，川崎市立看護短期大学紀要，第7巻，第1号，45－53，2002
- 13) 前掲書12)，45
- 14) 赤星誠：初対面の患者における看護現象の情報化の構造とその検証－精神病院での女性患者の看護実践の分析を通して－，宮崎県立看護大学研究紀要，第1巻，第1号，33－43，2000
- 15) 前掲書12)，53
- 16) 中井久夫：分裂病患者の回復過程と社会復帰について，中井久夫著作集4巻，治療と治療関係，4，岩崎学術出版

社, 1993

- 17) パトリシア・クラントン; 人江直子, 豊田千代子ほか訳: おとなの学びを拓く - 自己決定と意識変容をめざして -, 12, 鳳書房, 1999
- 18) 前掲書17), 13
- 19) 前掲書17), 13
- 20) 杉森みどり: 看護教育学, (3), 281, 医学書院, 1999

参考文献

- 1) 舟島なをみ, 杉森みどり編著: 看護学教育評価論 - 質の高い自己点検・評価の実現 -, 文光堂, 2002
- 2) 舟島なをみ: 看護教育学研究 - 発見・創造・証明の過程 -, 医学書院, 2002

資料 1

教員の学生さんへのかかわりに関する質問紙

この質問紙は、精神看護実習担当の教員の学生さんへのかかわりに対して、実習中、学生さんがどのようなことを感じていたのか。また、教員がかかわる中でどのような学びができたのかを知るためのものです。この質問紙の回答は全て統計的に処理され、個人を特定するものではなく、また実習の評価等に影響するものではありません。

皆さんの率直な意見をお伺いしたいので、ご協力をお願いいたします。

精神看護実習担当
福山・松岡・井上

1. まず、あなたの実習グループについて伺います。 () グループ

2. 精神看護学実習に来る前に、あなたはどのような気持ちを抱いていましたか。

あなたの気持ちに最も近いところに○をつけて下さい。

	非常に その通り	その通り	少し その通り	どちらでも ない	少し違う	違 う	かなり 違 う
	7	6	5	4	3	2	1
1) 楽しみだった	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
2) 不安だった	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
3) 期待していた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
4) 嫌だった	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						

3. 次の項目について、あなたの気持ちに最も近いところに○をつけて下さい。

	非常に その通り	その通り	少し その通り	どちらでも ない	少し違う	違 う	かなり 違 う
	7	6	5	4	3	2	1
1) 学生が観察したことを確認してもらえた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
2) 学生がアセスメントしていることを確認してもらえた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
3) 関連情報の視点を必要時提供してもらえた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
4) 自分の考えている事を引き出してもらえた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
5) 教員とのかかわりにより思考の整理ができた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
6) 教員とのかかわりによりアセスメントが高まった	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
7) 1人でするよりも患者に合った計画を立案できた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						
8) 困った時、計画に基づいた実施を導いてくれた	----- ----- ----- ----- ----- ----- -----						

	非常に その通り 7	その通り 6	少し その通り 5	どちらでも ない 4	少し違う 3	違 う 2	かなり 違う 1
9) 教員のかかわりによって、より一層実施の評価ができた							
10) 学生が看護者として考えていることを確認してくれた							
11) 事象が患者にとってどのような意味づけがあるのかを一層考えることができた							
12) 患者の健康な部分を引き出した り、改善すべきことに対して考 える機会を提供してもらえた							
13) 看護者としての良いモデルを学 べた							
14) 教員とのかかわりにより、一層 自分の行った言動や行動の振り 返りをし、その意味づけを行え た							
15) 教員とのかかわりにより自己理 解が深まった							
16) 教員とのかかわりにより、患者 と自分との関係を理解し、学び を深める機会が増えた							
17) 教員とのかかわりにより、相手 と他者との関係を理解し、考え る機会が増えた							
18) 自分の考えや感じたことを尊重 してもらえた							
19) 学生のできている事を保証して もらえた							
20) 学生の行動を見守ってもらえた							
21) 自らの感情機能を整え、行動へ の動機づけが高まるよう励まし てくれた							
22) 学生のできた事を称賛してくれ た							
23) 教員との信頼関係が築けた							
24) 学生のアイデンティティに触れ、 自分の弱さの克服ができるよう な声かけ・態度を示してくれた							
25) 一緒に考えようとしてくれたこ とで、相手へのかかわりにいか すことができた							
26) 患者の安全について必要な注意 を促してくれた							
27) 病院での約束事を予め、または 必要時、提示してくれた							
28) 教員に関係なく、自ら患者との かかわりの中から新たな発見が できた							

4. その他、この質問紙に対するご意見、あるいは、実習に関する感想などがありましたら、ご記入下さい。



ご協力ありがとうございました。